岡島（おかじま）遺跡

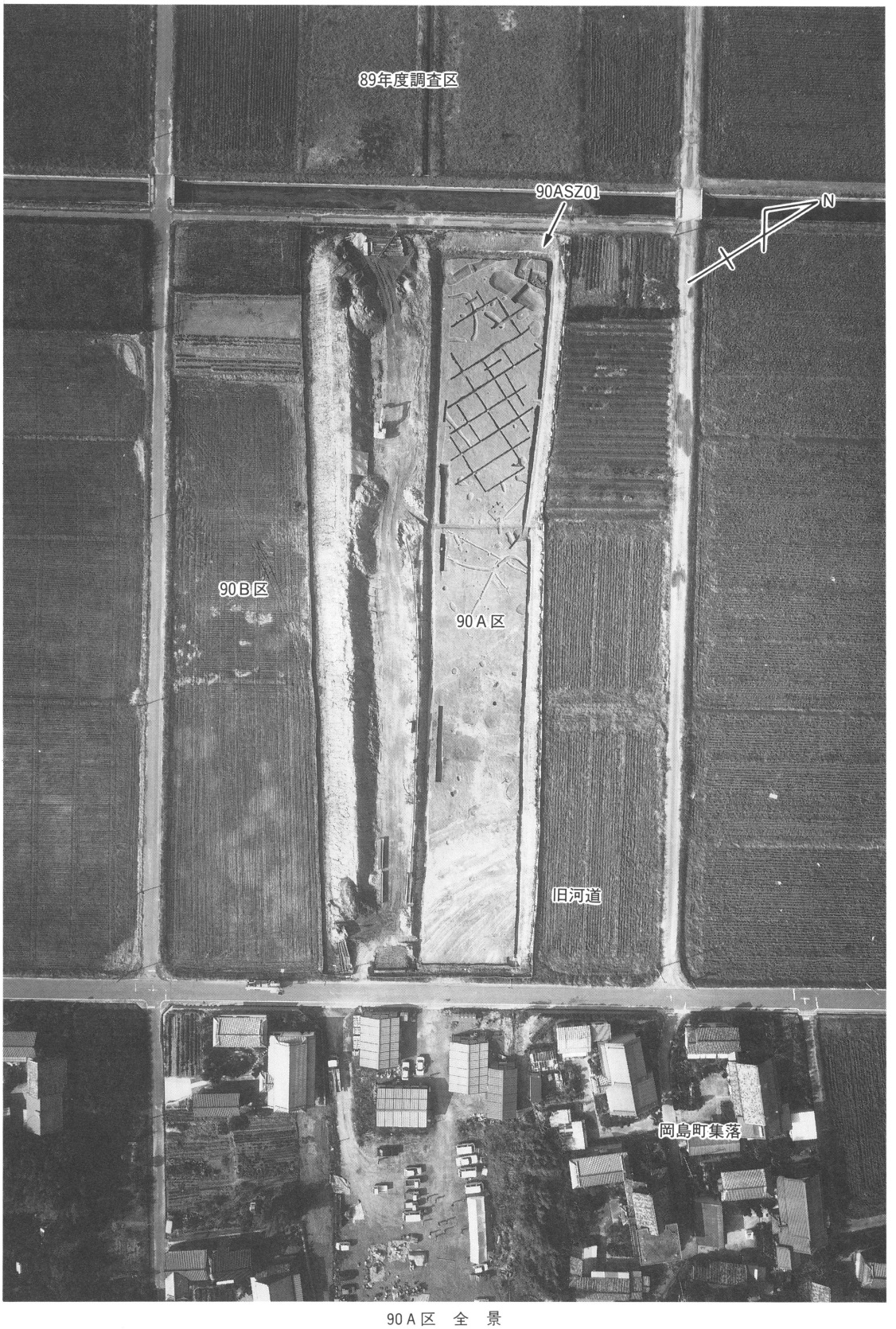
調査の経緯　岡島遺跡は、矢作川左岸の沖積低地上の微高地に所在する弥生時代を中心とする集落遺跡である。所在地の地目は水田および畑地となっており、西側に現在の西尾市街地がのる洪積台地が、東側には幡豆山塊を背景に岡島町の集落が展開している。なお、地表面の標高は、５m程度である。本センターが実施したこの遺跡の調査は、昭和61年度の試掘調査を皮切りとし、昭和62・63年度には県道蒲郡碧南線建設に伴う調査を終了し、平成元年度からは、国道23号線バイパス建設に伴う調査を開始している。

遺　跡　遠　景

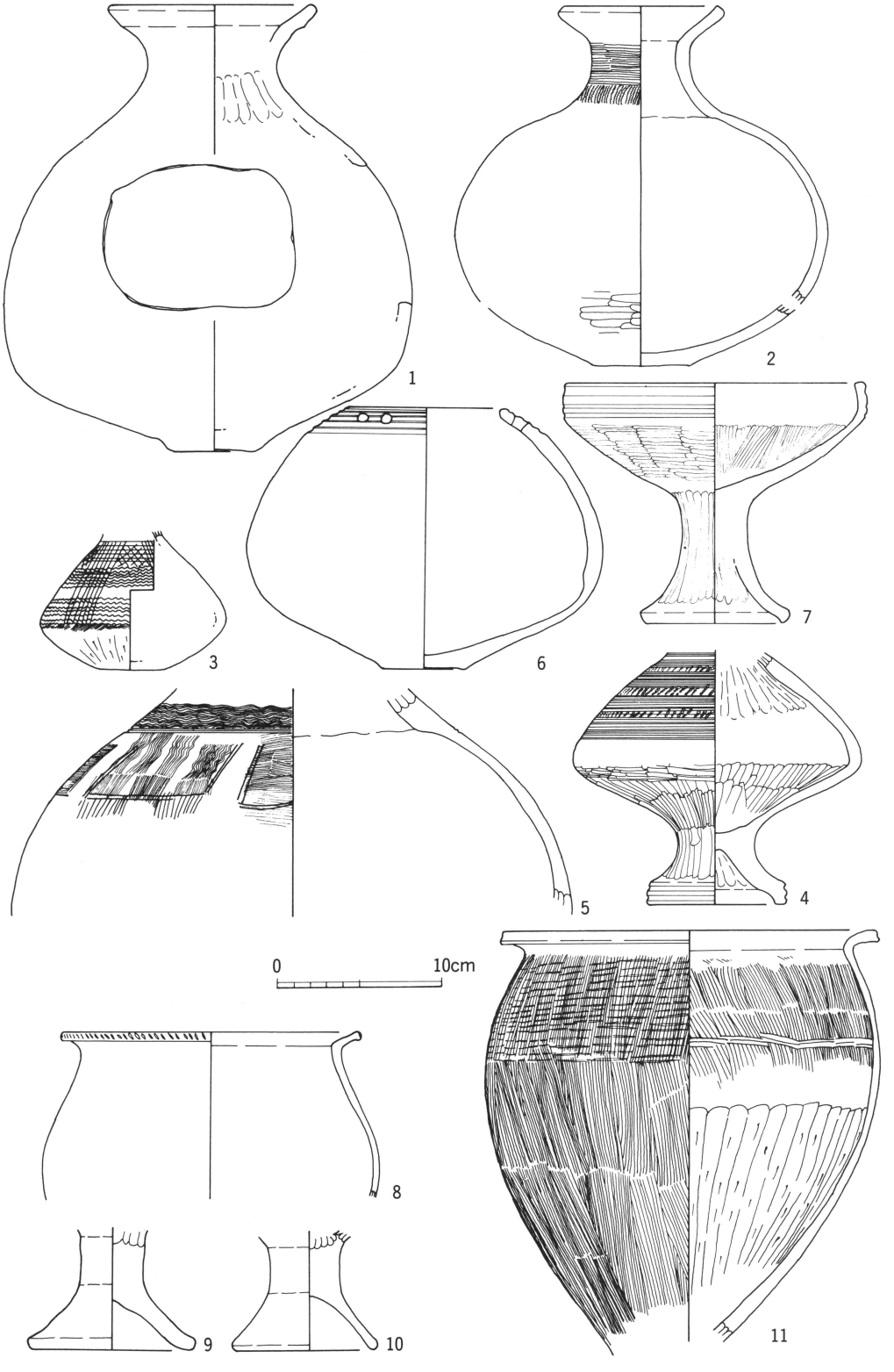
本年度の調査区は、平成元年の調査区の東方にあたり、岡島遺跡の南端部に該当していることが考えられる。調査面積は、9000m²である。なお、具体的調査にあたっては、これをさらに排土などの関係で、Ａ・Ｂ区の２地区に分割して実施した。今回の報告は、調査期間が地下水位の低下する冬期に設定され、現在も調査が継続中である関係上、Ａ区上面で検出された周溝墓（90Ａ　ＳＺ01）とその出土遺物を中心とする。

遺構　ここで報告するＡ区上面とは、県道蒲郡碧南線建設に伴う調査で報告（以下、県道報告書）した第１面・第２面に該当する。これらは、前者が古墳時代後期～中世頃、後者が弥生時代中期末に該当しているが、本年度調査区においてはこれらを同一面で検出し（上面）、遺構埋土の差異によりこれを識別している。遺構の分布状況は標高が高い西側にほぼ集中し、東側では遺構も希薄。具体的に検出できた遺構は、第１面では、溝数条・土坑十数基である。遺構の配置などに規格性はうかがえない。一方、第２面では周溝墓３基・土器棺１基を確認でき、墓域としての性格を考えることができる。そして、土器棺の検出数が89年度のそれと比較し、希薄になる傾向が強いことや、検出されている周溝墓の存在を重視するのならば、ほぼ、90年度の調査区と、89年度の調査区ととで墓制の差が存在しているのかもしれない。ただし、周溝墓の検出数がやや乏しく、今後の検討を要する。

今回報告する遺物を出土した周溝墓ＳＺ01は、調査区の北西隅に存在し、その全貌は検出できててはいない。周溝の規模は、幅2.3～2.6m、検出面からの深さ0.6mである。



90A区　全　景



90A　SZ01 出土遺物

遺物　ＳＺ01からは周溝の北側部分で、集中して多数の土器が出土している。これらの土器は現在整理中で、代表的な11点についてのみここで報告する。なお、器種名については、県道報告書に従う。

１は広口壺Ｂ。にぶく屈曲する口縁部に、肩部と腰部が張る全体に四角形に近い体部を有する。無文で、焼成後穿孔による円窓を有する。２は細頸壺。口縁部は直線的で、口端はやや肥大する。頸部は太く、体部は１と同様に、肩部と腰部が張り全体に四角形に近い。外面の腰部以下にミガキ調整を加える。頸部に文様がみられ、上方に櫛による直線文、下方に貝殻による刻目文を施す。３は細頸壺。「ソロバン玉状」の体部を有する。外面の腰部以下にはケズリ調整を加える。文様は腰部より上方で、櫛による直線文、波状文と櫛による縦方向の直線文、篦による斜格文を施す。４も細頸壺。３に太くがっしりとした台部を有する。腰部は強く張る。文様は腰部よりやや上方と、台部の縁帯とでみられ、前者は櫛による直線文、刻目文を交互に配し、後者は凹線文を施す。５は広口壺か。頸部下方と肩部のみの破片であるが、肩部は張る。１・２と同様に全体に四角形に近い体部を有するか。頸部には櫛による直線文と波状文が、肩部には篦による直線文で設定された区画中に櫛による縦方向の直線文、波状文を充塡する。６は無頸壺。１・２・５と同様に肩部と腰部が張る全体に四角形に近い形状。口縁部には凹線文がみられる。７は高杯。細く高い脚部と、「鉢状」の杯部を有する。口縁部には凹線文を施す。８は甕。腰部以下を欠くが、丸味を帯びた体部に短く屈曲する口縁部を有する。９・10は甕の台部。上方は柱状に発達する。11も甕。台部を欠くが、肩部付近に最大径を有する丸味を帯びた体部と、短く屈曲する口縁部を有する。外面はハケメ調整とタタキ調整により、内面はハケメ調整とケズリ調整による。

まとめ

若干のまとめとしてＳＺ01出土土器の時期について考えてみたい。まず、１・２・５・６・８～10は、在地系の土器である。いずれも淡灰色の色調を呈し、土器を黒色に焼成するという原則が崩壊しつつある様子をうかがうことができる。また、６にみられる在地系の器形に施される凹線文は、これが外来的要素を受けた結果であったことの１つの根拠になりうるだろう。つぎに３・４・７・11は外来系の土器で、これらが定着しているものと考えることができる。以上の様子から、ＳＺ01出土土器の内容を県道報告で提示されている編年にあてはめるとⅣ－２期に該当し、従来良好な資料に恵まれなかったこの段階の資料を補足するものである。

（池本正明）